

有事緩和クロス円の円安、不透明性も円安余地

世界で商品・物価・金利高止まり、日本は貿易立国揺らぎ

(株) ジャパンエコノミックパルス

Japan Economic Pulse Co., Ltd.

info@j-pulse.co.jp

2026/4/13 (月)

為替相場は中東有事の緩和により、クロス円取引（円の対非ドル通貨）で円安・外貨高となっているが、中東問題に不透明性はあっても円安の持続余地が注目される。当座は米イランの停戦・戦闘再開でも資源や重要物資の供給・輸送は障害が続き、世界的に商品相場や物価、金利は高止まりとなる。海外中銀の利下げ休止や利上げ移行などとあいまって、円安・外貨高の要因となりやすい。日本は海外から素原材料を輸入し、付加価値の高い製商品を輸出して外貨を稼ぐ「貿易立国」が揺らいでおり、構造円安を後押しさせる。

四半期・外貨高値、前期末値比で一定の上昇幅

「(中東紛争で原油・ガス・重要物資等は生産や輸送が阻害されているが) こうした供給の中断は、すでに世界各国で波及効果を及ぼしており、この先もしばらくそれが続くことになる」、「供給不足は原材料の価格上昇につながり、多くの消費財に転嫁されて、インフレ率を押し上げる」、「同時にインフレ期待のアンカーが外れ、コストの大きい物価上昇を誘発する恐れがある」――。

IMF のゲオルギエバ専務理事は 4 月 8 日、このような懸念を示した。

こうしたリスクにより、当座は米国とイランの停戦・戦闘再開でも、世界的に商品相場や物価、金利は高止まりとなりやすい。海外の中銀による利下げ休止や利上げ移行を促すものだ。為替相場では 4 月 6 日以降、中東有事の緩和により、クロス円取引（円の対非ドル通貨）で円安・外貨高となっているが、中東問題に不透明性はあっても円安の持続余地が注目される。

ちなみに 6 日以降のクロス円での円安・外貨高については、リスク選好による円安や、リスク選好を受けた他国比で依然低金利の円の調達と高利回り投資のキャリー取引再開、有事のドル買い後退と対ドルでの非ドル通貨の反発（対円で非ドル通貨が連れ高＝非ドル通貨高・円安）などが影響している。

クロス円の四半期ベースでは四半期中の外貨高値や外貨安値に関して、ここ数年は前期の期末値比で最大で「+10 円や－10 円」前後といった変動ケースが見られてきた。あくまで昨春の米関税ショックのような市場混乱を除いた平時実績ながら、目先も 4－6 月時における外貨の上値メドや下値メドとして注目されそうだ。

ブルームバーグの為替レートによると、最近のクロス円の四半期別動向と当座の上値メドは以下のようになっている。

<ユーロ/円の上値メド> 四半期中のユーロ最高値の前期末値比・上昇幅は、今年 1－3 月が +2.8 円、昨年 10－12 月が +11.3 円。その前は昨年 7－9 月から 2024 年 1－3 月にさかのぼる形で、+5.5 円、+7.7 円、+1.7 円、+7.1 円、+3.1 円、+9.2 円、+9.5 円。

直近の前期末値である今年 1－3 月末値は 183.44 円。「足元 4－6 月の高値メド」は、3 月末値比 +5 円で 188 円、+7 円で 190 円、+10 円で +193 円。

<ポンド/円の上値メド> 四半期中のポンド最高値の前期末値比・上昇幅は、今年 1－3 月が +4.0 円、昨年 10－12 月が +12.7 円。その前は昨年 7－9 月から 2024 年 1－3 月にさかのぼる形で、+3.5 円、+5.6 円、+1.3 円、+8.0 円、+4.8 円、+12.6 円、+13.8 円。

直近 1－3 月の期末値は 210.07 円。「足元 4－6 月の高値メド」は、+5 円で 215 円、+8 円で 218 円、+12 円で 222 円。

<スイス・フラン/円の上値メド> 四半期中のフラン最高値の前期末値比・上昇幅は、今年 1－3 月が +6.4 円、昨年 10－12 月が +12.7 円。その前は昨年 7－9 月から 2024 年 1－3 月にさかのぼる形で、+6.0 円、+12.2 円、+1.5 円、+7.8 円、+1.0 円、+11.6 円、+4.0 円。

直近 1－3 月の期末値は 198.41 円。「足元 4－6 月の高値メド」は +6 円で 204 円、+8 円で 206 円、+12 円で 210 円。

<カナダ・ドル/円の上値メド> 四半期中のカナダ・ドル最高値の前期末値比・上昇幅は、今年 1－3 月が +2.9 円、昨年 10－12 月が +8.5 円。その前は昨年 7－9 月から 2024 年 1－3 月にさかのぼる形で、+3.1 円、+3.1 円、+1.1 円、+5.6 円、+1.2 円、+5.9 円、+5.6 円。

直近 1－3 月の期末値は 114.08 円。「足元 4－6 月の高値メド」は +2 円で 116 円、+3 円で 117 円、+5 円で 119 円。

<豪ドル/円の上値メド> 四半期中の豪ドル最高値の前期末値比・上昇幅は、今年 1－3 月が +9.3 円、昨年 10－12 月が +7.4 円。その前は昨年 7－9 月から 2024 年 1－3 月にさかのぼる形で、+3.6 円、+2.1 円、+1.8 円、+3.1 円、+2.0 円、+8.8 円、+3.9 円。

直近 1－3 月の期末値は 109.44 円。「足元 4－6 月の高値メド」は +4 円で 113 円、+7 円で 116 円、+9 円で 118 円。

中東有事による供給制約に対し、日本は資源・食糧を始め各分野で自給率が低い。日本経済の存立基

盤である海外から素原材料を輸入し、付加価値の高い製商品を輸出して外貨を稼ぐ「貿易立国」が揺らいでおり、改めて構造円安を後押しさせる。

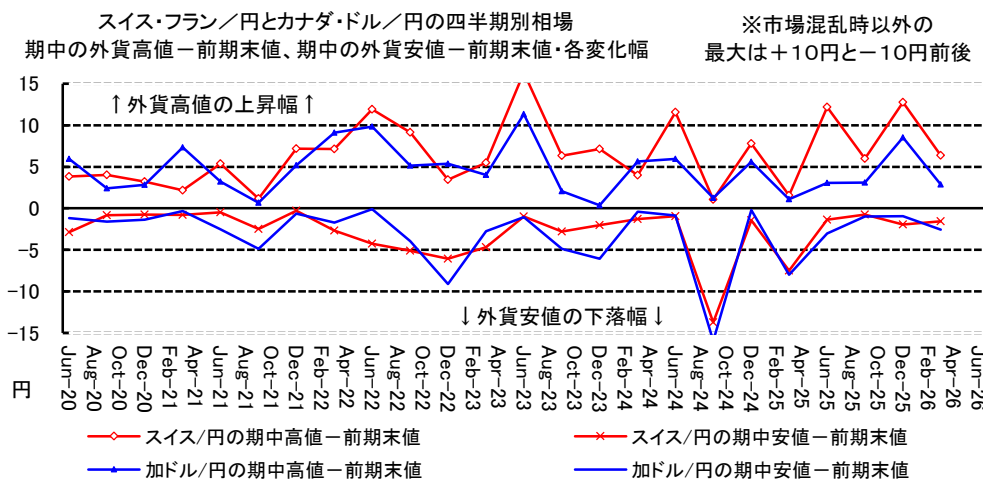
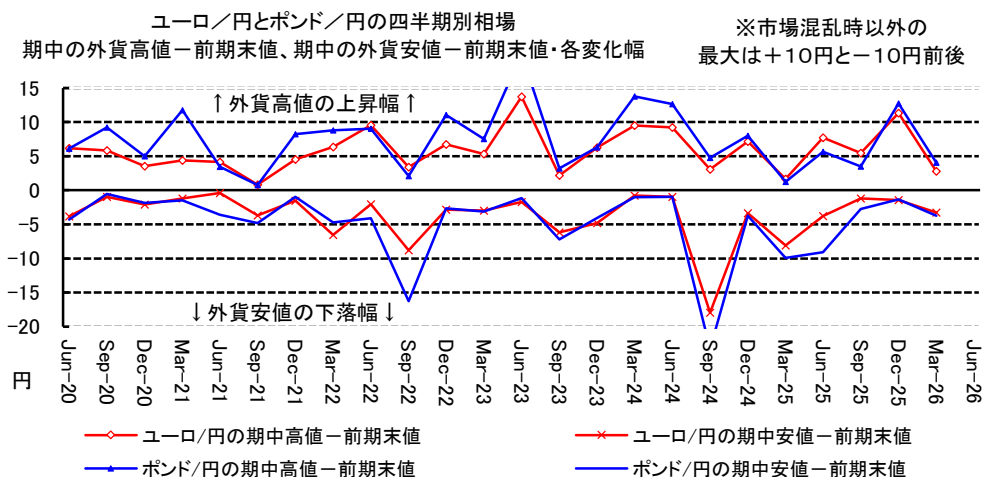
目先の日本の貿易取引では、世界減速懸念や米政権による米国向け輸出の牽制などもあり、「外貨を稼ぐ」輸出は制約を受ける。反対に輸入は資源・物資の調達難や価格上昇などにより、ドルなどの「外貨支払いと外貨確保」は重要性和必要額の増加が見込まれる。為替相場では外貨売り・円買いによる円高の減退と、外貨買い・円売りの累増による円安を後押しさせていく。

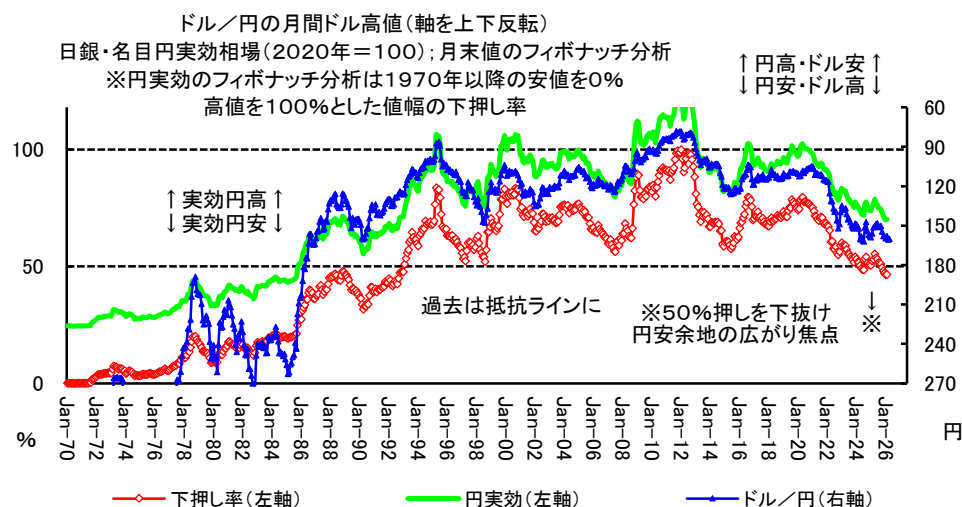
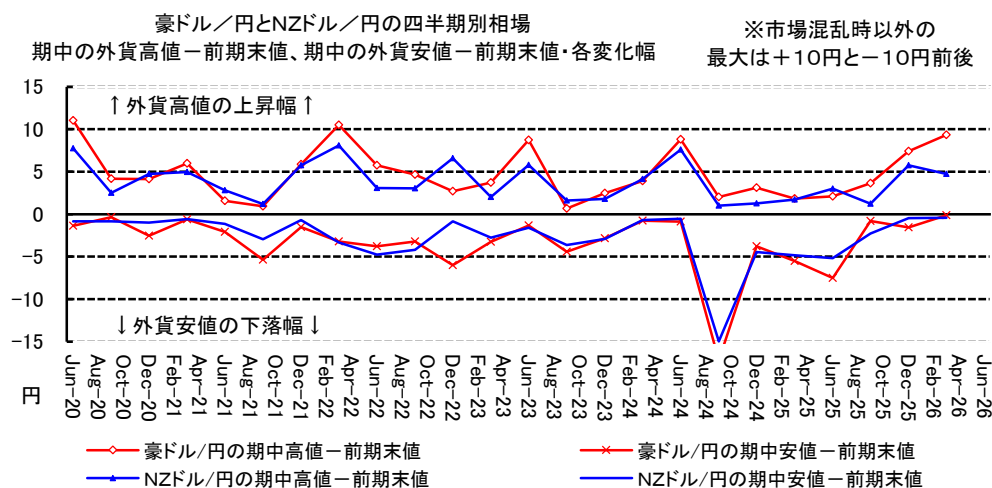
4月6日以降は米国とイランの停戦合意と詳細の交渉入りにより、有事懸念は一服となっている。しかし、米国によるイラン攻撃とイランによる中東産油国への攻撃などにより、原油・ガスなどの生産施設や物流ルートは損傷している。現在もホルムズ海峡では緊張が続き、供給の正常化には時間を要する。

しかも海上輸送については、ホルムズ海峡の通行料引き上げリスクのほか、保険料の上昇、運搬燃料の費用上昇、地政学リスクによる輸送の自粛、迂回ルート使用の場合の時間とコスト負担の増加などにより、当座は輸送量の制限とコスト上昇、輸送品への一段の価格転嫁リスクがくすぶる。

そのため当座は米イランの停戦、戦闘再開でも、世界的に商品相場や物価、金利は高止まりとなりやすい。海外中銀の利下げ休止や利上げ移行を促すものだ。為替相場では6日以降、中東有事の緩和により、クロス円取引（円の対非ドル通貨）で円安・外貨高となっているが、中東問題に不透明性はあっても円安の持続余地が注目される。

世界的なインフレ上昇は、日本でも日銀の早期利上げや利上げ回数の増加につながり、円安抑制や円高の要因となり得る。しかし現在の場合、1) 日本は資源の輸入依存度が高く、資源高への経済耐性が脆弱、2) 日本の金利水準は他国比で低く、その中で日銀が利上げを強化しても、海外で金利上昇や利下げ休止・利上げとなる局面では、金利差の縮小が限られる、3) 日本では資源高に対して節電・節約要請よりも、政府の補助金で対応しており、資源の高止まり持続は日本の財政悪化懸念につながる、4) 現在の日本は円安が資源高と輸入物価の上昇を増長させており、他国比での名目金利の低位持続とあいまって日本の実質金利は再低下している（金利<物価）——といった状況にある。いずれも円安要因であり、日銀の利上げによる円高効果は短期的かつ限定的になっている。





お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。